

アンカラ民族学博物館所蔵トルファン郡王家関連史料の調査

小沼 孝博

2014年3月13日から15日までの3日間、トルコ共和国の首都アンカラを訪れた。筆者にとって初めてのトルコ訪問であったが、その目的はアンカラ民族学博物館（Ankara Etnoğrafya Müzesi）に所蔵される清代トルファン郡王家関連史料を調査することにあった。トルコ共和国の公的機関における調査方法など、オスマン史やトルコ共和国史の研究者にとってはもはや常識に属し、わざわざ紙幅を費やして述べるに値しないであろう。しかし、中央アジア史、とくに新疆史・東トルキスタン史研究の分野では、そのような機会は決して多くない。本誌において民族学博物館の調査手続きを紹介することは、いささかなりとも価値がみとめられると考え、この小論を草した次第である。

1. トルファン郡王家関連文書

トルファン郡王家は、18世紀前半に清に帰順したエミン・ホージャ（1684/85–1777）を始祖とする。エミン・ホージャは、1720年代の清とジュンガル戦争のなか、最前線のトルファン盆地において清軍に協力的な在地のムスリム有力者として頭角を現した。しかし1732年にジュンガル軍が撤退すると、清の徙民政策にしたがい、翌年にかけて約1万名のトルファン住民を率いて甘粛の瓜州に移住した。移住後にエミン・ホージャは、清から移住民を統括するジャサクに任命され、輔国公の爵位を授与され、清の外藩王公に列せられた。その約20年後、清がジュンガルの征服に成功すると、1756年にエミン・ホージャは旧トルファン住民とともに郷里への帰還を果たし、さらに清の東トルキスタン（新疆南部）征服に貢献した。以後、清代を通じて彼の子孫は郡王の爵位を継承し、居城ルクチュンを中心とするトルファン盆地東部の領域と住民を支配した〔佐口 1986: 146–197; Onuma 2012〕。

アンカラの民族学博物館には、このトルファン郡王家に関連するテュルク語（チャガタイ語）史料が2件所蔵されている。一つは、縦 55.5 cm × 横 50.0 cm の一枚ものの文書であり、

文書番号は13135である（以下、13135文書）。もう一つは、104葉からなる写本であり、文書番号は13138である（以下、13138文書）。これらトルファン郡王家関連史料がアンカラに将来された経緯は不明ながらも、その存在は1951年にAhmet Temirが発表した短い紹介文によって世に知られることになった〔Temir 1951〕⁽¹⁾。

13135文書については、1961年にTemirが文書のファクシミリを付した論考を発表し、内容の紹介をおこなった。それによれば、13135文書は、ジューンガルのトルファン侵攻から、トルファン住民の清領内への移住、清からエミン・ホージャへのジャサク印と公爵の授与までの経緯（1722/23–1740/41）を記したものである。またTemirは、文書が途中で切り取られ、不完全な形で終了していることから、本来13135文書はもっと長い内容を持ち、13138文書につながるものだったのではないかと推測している〔Temir 1961: 193〕。いずれにせよ、13135文書は18世紀前半のトルファン社会の変動を伝える数少ない一次史料であり、佐口透も、Temirの解釈によりながら、トルファン住民の瓜州移住後の生活の様子を考察している〔佐口1986: 156–159〕。ただし、歴史的・地理的な知識が不足していたためか、Temirの解釈には誤りも多く、とくに地名の比定は正確さを欠いていた。この点もふまえてAbudurishid Yakupは、言語学的見地から文書にみられるトルファン方言の要素について検討するとともに、13135文書の解釈の補正をおこなった〔Yakup 2007〕⁽²⁾。

他方、13138文書については、かつて当該文書を調査した濱田正美が指摘するように、『欽定外藩蒙古回部王公表伝』（1779年、以下『表伝』）巻111の「扎薩克多羅郡王額敏和卓列伝」のテュルク語訳である〔濱田1993: 131〕。濱田は満洲語版『表伝』からの翻訳と推測しているが、David Brophyはモンゴル語の強い影響を受けたテュルク語訳であることから、翻訳にあたって満洲語版とモンゴル語版の双方が参照されたと述べている。またテュルク語訳が、『表伝』成立後の1800年までの記事を含み、とくにエミン・ホージャの子孫に関して独自の情報を含んでいるので、単なる『表伝』からの翻訳ではないと指摘している〔Brophy 2013: 251–254〕。Brophy氏は現在、13138文書に関する総合的な研究の公開を準備しているとのことなので、それを鶴首して待つことにしたい。

⁽¹⁾ ただし、1951年当時における文書番号は現在のものと異なっていたようで、Temir [1951] では13135文書の番号を13139とし、13138文書を13142としている。

⁽²⁾ 近年ではKim [2012: 608–611] が、Temir [1961] に依拠してエミン・ホージャの清朝帰順の経緯を論じているが、Yakup [2007] の研究を見逃している。

2. 事前の準備：閲覧と撮影の申請

アンカラ民族学博物館訪問の目的は、上記の二つの文書の閲覧にあった。とくに 13135 文書は、18 世紀前半の清朝西辺／ジュンガル東辺の政治・社会状況を知る上で重要な史料であり、また瓜州のトルファン住民に対する清朝政府からの土地や水路の提供など、公権力による資源の分配という点で注目すべき内容を含んでいる。しかし、地名の比定など、テキストの確定にはなお十全とはいえない状況であるため、13135 文書については、論文上での鮮明なファクシミリ掲載を念頭に置いた写真の撮影を希望していた。

事前に民族学博物館にアポイントメントをとるべく、まず 2014 年 1 月 6 日に、博物館の Web サイト（www.etnografyamuzesi.gov.tr、英文版あり）に掲載されているメールアドレス（ankaraetnografyamuze@kulttur.gov.tr）に英語で文書照会と訪問予定のメールを送った。ところが 1 月末になっても返信がなかったため、オスマン史研究者の澤井一彰氏に助力を求めた。すると澤井氏は、アンカラの中東工科大学（Orta Doğu Teknik Üniversitesi）で教鞭をとられているご友人の方を通じて、ただちに博物館に連絡していただいたようで、数時間後には博物館長補佐の Mehmet Demir 氏からトルコ語の返信が届いた。それによれば、照会した二件の文書は確かに所蔵目録に掲載されているが、博物館コレクションの学術調査と写真撮影（有料）には、「文化観光省」（Kültür ve Turizm Bakanlığı）の「文化財・博物館総局」（Kültür Varlıkları ve Müzeler Genel Müdürlüğü）から許可をえる必要があるとのことだった。

再び澤井氏のご教示をえて、文化財・博物館総局にある博物館担当の関係部署（muzeler@kulturturizm.gov.tr）にメールを送った。4 日後、博物館局（Department of Museums）の担当者から、トルコ語と英語で書かれたワードファイルの申請書が添付されたメールが届いた。指示にしたがって申請書に必要事項を入力し、プリントアウトして署名したのち、それをスキャンして PDF 化し、パスポートと住所証明⁽³⁾のスキャン画像とともに、指定のアドレス（muzearastirmalari@kulturturizm.gov.tr）に返送した。

提出後、とくに連絡がこなかったため、しばらくして問い合わせると、文化観光省が発行した史料閲覧と撮影の許可証明書（トルコ語）をスキャンしたものが、出発 6 日前の 3 月 8 日に送られてきた。当初、撮影と公開の許可を願い出ていたのは 13135 文書だけであったが、許可証明書では 13138 文書についても同様の許可が下りていた。その日のうちに、その許可証明書を博物館の Demir 氏に転送し、なんとか事前の準備を終えることができた。

⁽³⁾ 今回は日本の運転免許証の住所欄に英語訳を付して提出し、それを認めてもらったが、国際運転免許証など英語による住所証明を取得しておくことが、より望ましいだろう。

3. 現地での調査

3月13日、成田空港からトルコ航空で出発し、イスタンブルを経由して、深夜アンカラに到着した。翌14日の午前中、さっそく民族学博物館に向かった。1930年開館の当館は、アンカラ市中心部に近いナマズガーフ地区と呼ばれる小高い丘の上にあり、絵画・彫像博物館（Resim ve Heykel Müzesi）と隣り合っている。建物の正面（東側）にはトルコ建国の父ムスタファ・ケマルの騎馬像が、眺望の開けている東側の街並みを遠く見据えていた。



写真1 アンカラ民族学博物館

玄関を入り受付で、プリントアウトして持参していた許可証明書と Mehmet Demir 氏からのメール文面を受付職員に提示して来意を告げると、2階のオフィスルームに通され、そこで Demir 氏に面会した。Demir 氏に許可証明書に手渡すと、氏はほかの職員に指示をされ、数分後に二つの史料が運ばれてきた。

一見して、史料の状態は決して良好とはいえなかった。13135 文書は、手元にきた時は折りたたまれており、展開してみると、折り目が裂けてしまっている箇所が複数目についた。文書上部には破損箇所をセロハンテープのようなもので「補修」した形跡があったが、経年

劣化により紙とテープが一体化してしまい、むしろ文字の判読が困難となっていた。また Temir 論文所収のファクシミリでは、13135 文書 14 行目末尾に、人為的に切り取られた破損箇所がある。その部分について Temir は、切り取り部分の上部にわずかに残る文字の線形から、15 行目にも現れる کوردوم که کوتاش (Kördüm ki Kütash)⁽⁴⁾ が記されていたはずであると推測している [Temir 1961: 197]。その推測自体に異議を差し挟むものではないが、驚くべきことに、現在の 14 行目末尾には小さな紙が裏打ちされ、その上に青色のインクペンの筆跡で、上記のアラビア文字がそのまま書き込まれていた。いつの段階で書き込みがなされたか不明であるが、これは明らかに史料の改竄であろう。その場において文言の確認と写真撮影を適宜おこなったが、Temir 論文所収のファクシミリと比べて文書の劣化は明らかであり、その意味においても現状を伝えるカラー写真の公表は意義があると感じた。

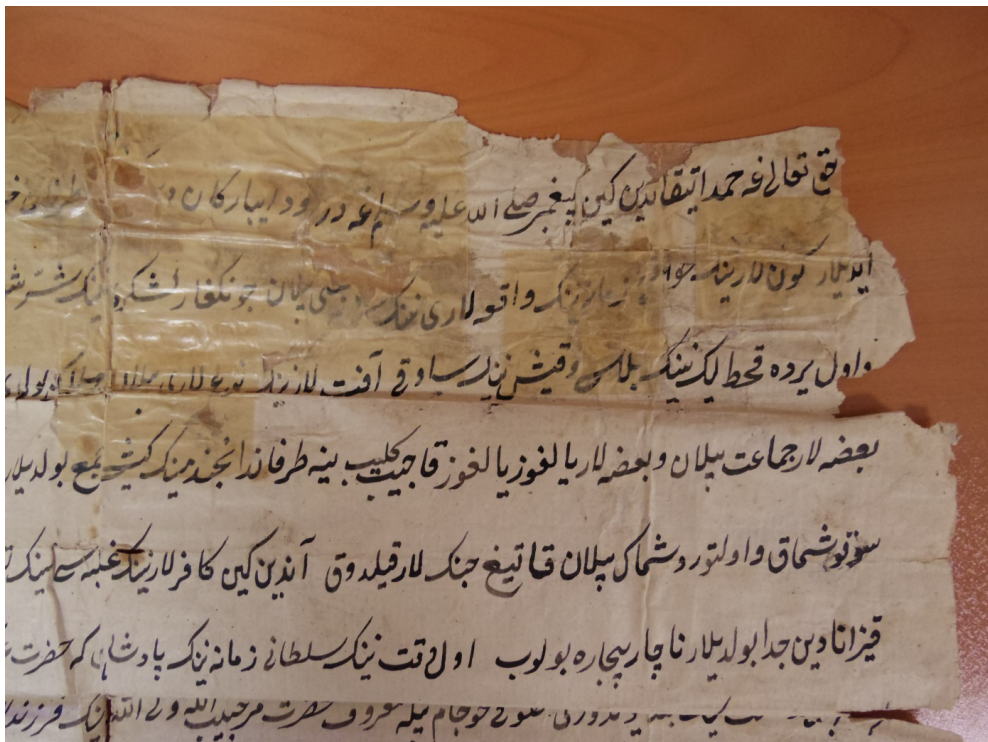


写真2 破損の激しい 13135 文書の冒頭部分

他方、13138 文書は、かつての状態を知らないとはいえ、冒頭と末尾の破損は激しく、一葉一葉をめくるのも憚られるほどであった。すると職員の方から、数年前に撮影した 13138

⁽⁴⁾ 文脈からして地名であることは確実だが、実際にどの地域に比定できるかは不明である。

文書のデジタル写真の画像があることを告げられ、しかも大変ありがたいことに、その画像をわざわざCD-Rにコピーして提供していただいた。なお、Brophy氏も同じ画像を民族学博物館訪問時に提供してもらい、それをもとに13138文書の研究を進めているとのことである。

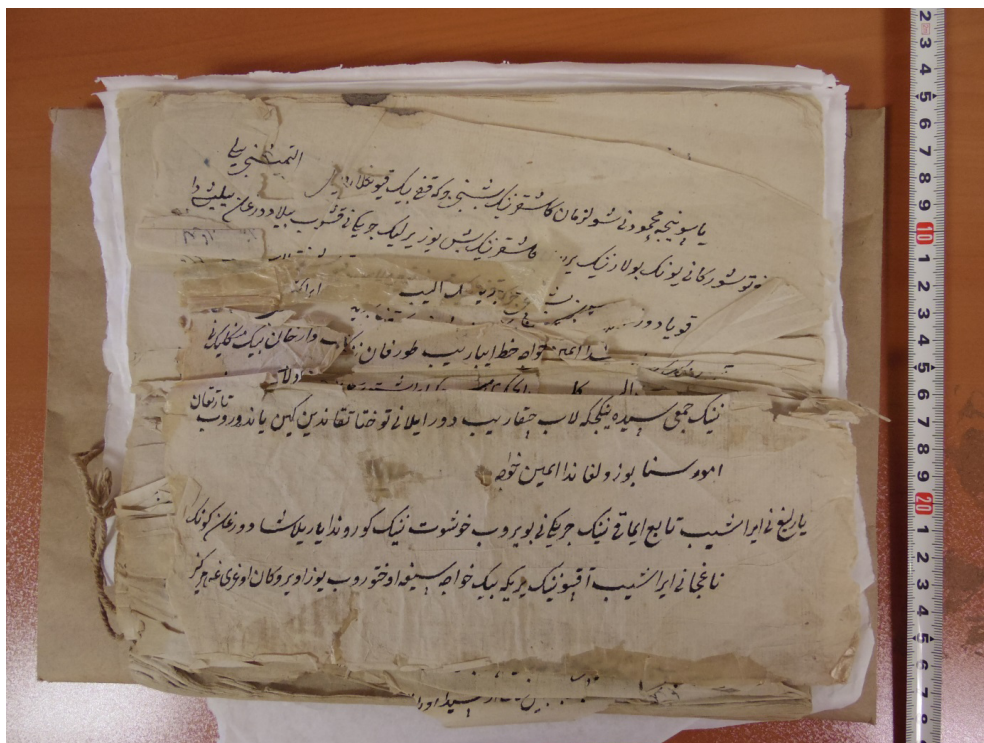


写真3 13138文書

13138文書の撮影時間が省かれたこともあり、調査自体は午前中で終了した。写真撮影の料金（1枚あたり21.35TL）を支払い、博物館をあとにしようとする、料金納付者の氏名と金額をきちんと記録に残す必要があるため、銀行に行つて指定の口座に料金を振り込んでくるようにいわれた。とはいえ、銀行がどこにあるかもわからず、たとえ行き着いたとしても、用件を伝えられるトルコ語の会話能力など持ち合わせていない。結局、英語が堪能であった職員のTuba Önen氏に車で市の中心部まで連れて行ってもらい、駐車場からは車に同乗したメフメトと呼ばれる男性⁽⁵⁾の付き添いのもと銀行で料金の振り込みを済ませることができた。

⁽⁵⁾ この男性（50歳前後）は、博物館に戻る途中、下車してどこかへ行ってしまった。やさしい笑みを絶やさない物静かな方であったが、どうやら博物館の職員ではないようで、その素性は明らかでない。

4. 調査を通じての雑感

以上が民族学博物館で筆者がおこなった調査のあらましである⁽⁶⁾。新疆・東トルキスタン地域の歴史を研究する身として、今回のトルコにおける調査はあらゆる意味で刺激的であり、短期間であったが非常に貴重な経験となった。また 13135 文書については、関連史料の収集に努め、速やかな成果公開を期したい⁽⁷⁾。

今回の調査を通じて二つほど気に留まったことがある。一つは、民族学博物館にコレクション閲覧のためのスペースが確保されていなかったことである。文書の閲覧と撮影は、2 階のオフィスルームの外にある廊下に重ねられていた机の上でおこなった。常に後ろを職員や来客が行き来している状況であり、上述の文書の保存状態とあわせて、コレクションの管理上、やや問題があるのではないかと感じた。もう一つは、博物館に英語を解する方がほとんどおらず、コミュニケーションに困ったことである。むろんその根本的原因是、せいぜい「挨拶会話」が関の山である、筆者の拙く乏しいトルコ語会話能力にある。事前にアポイントメントをとる段階でもトルコ語でメールが送信されてくることがあり、やはり最低限のトルコ語能力は必要であると痛感した。

最後になるが、ご多忙中にもかかわらず、Mehmet Demir 氏や Tuba Önen 氏をはじめとする民族学博物館の職員各位からは温かく迎えられ、様々な便宜をはかっていただいた。また事前の準備段階においては、澤井一彰氏からご助力を賜った。この場を借りて厚く御礼申し上げたい。

《附録》“フンカル国” 小考・補説

さきに筆者は、オスマン朝の君主の呼称の一つである *Khūn-kār* に由来する語彙（以下、史料引用部分を除いて「フンカル」と記す）が、18-19 世紀に中央アジアや清朝治下の諸集団の間で共有されており、オスマン朝あるいはオスマン皇帝に関する多様な言説を生み出していたことを指摘した [小沼 2006; 2008]。拙稿はフンカルの語が現れる史資料を紹介したものにすぎなかったが、意外にも多方面から反響があった [坂井 2008; Mosca 2010; 鍾 2010;

⁽⁶⁾ 3 月 15 日に民族学博物館を再訪して常設展示を参観した。なお博物館の開館時間は、8:30-12:30、13:30-17:30（日曜は休館）であり、常設展示の写真撮影は無料である。展示品を含むコレクションの一部は、博物館の Web ページに写真が掲載されている。

⁽⁷⁾ 北京や台北の研究機関には瓜州トルファン人社会に関する清朝史料が残されており、現在筆者はその収集と分析に取り組んでいる。

2014]。それらはフンカルに関する史料や知見を数多く提示しており、それにもとづいて拙稿の所論には修正すべき個所があるのだが、ここでそれを逐一詳述する余裕はない。ただ興味深いのは、鍾煥 [2010: 50–58] が指摘するように、18–19 世紀に成立したモンゴル語年代記中にもフンカル関連の記述がみられることである。トルコにおける調査報告をしたためたこの機会を利用して、以下に紹介しておきたい⁽⁸⁾。

①ゴンボジャブ (Gombojab) 『ガンガイン・ウルスハル』 (Gangya-yin urusqal)

1725 年にゴンボジャブによって編纂された『ガンガイン・ウルスハル』(ガンジスの流れ) は、チンギス・カンとその一族後裔の事蹟と系譜をまとめたものである [森川 2007: 350–369]。この『ガンガイン・ウルスハル』では、チンギスの次子であるチャガタイの5人の息子について、以下のように記している (下線は筆者によるもの)。

親王チャガタイは白帽の回子 (čayan mayltai [sic. < malaya-tai] qoyiči) の国でハーンとなり、ジルケル (Jirkel, ヤルカンド?) 城に都を置いた。その5人の息子から、長子アブドゥラ・ハーン (Abdula Qayan) が父の地位を継承した。次子イムマクリ (Immaquli < Imām Quli?) はサルト人の国でハーンとなり、サマルカン [ド] 城に都を置いた。[第三子] アダルマーマド (Adarmayamad < ‘Abd al-Muḥammad?) はインド国でハーンとなり、バラシャ (Balaša, バルフ?) 城に都を置いた。第四子コンクル (Köngkür) はルーム国でハーンとなり、イスタンブル (Istambul) 城に都を置いた。第五子テムル (Temür) は赤帽 (ulaŋan mal[a]ŋa) のウユンガ (Uyungy-a < Urungy-a, ウルゲンチ?) 国でハーンとなり、ボハイル (Boqayir, ブハラ?) 城に都を置いた [GhU/P: text 12–13; GhU/Č: 14–17]。

森川 [2007: 357] が指摘する如く、事実関係からみて、以上の記述はほとんど信用できるものではなく、人名と地名の正確な比定も難しい。ただし、ここで注目すべきは、実在しないにせよ、チャガタイの第四子として「コンクル」(＝フンカル) なる人物が「ルーム国」(オスマン朝⁽⁹⁾)でハーンとなり、イスタンブルに首府を定めたと述べられていることである。要するに、事実無根ながらも、オスマン皇帝(フンカル・ハーン)はチンギスーチャガタ

⁽⁸⁾ 以下に利用するモンゴル語文献のなかには、栗林均氏、岡洋樹氏より拝借させていただいたものがある。厚く御礼を申し上げたい。

⁽⁹⁾ 明代以降の漢語文献では、Rum の音訳である「嚕密」「魯迷」に類する語はオスマン朝を指した [和田 1958: 697–701]。

イの系譜に属するという見解が示されている⁽¹⁰⁾。そしてこの見解は、『ガンガイン・ウルスハル』以降、18-19世紀に著されたいくつかのモンゴル年代記に転用されていった〔鍾 2010: 53-55〕

②ジンバドルジ (ĴimbadorĴi) 『ボロル・トリ』 (Bolur toli)

『ガンガイン・ウルスハル』から約1世紀後、1837年成立のジンバドルジによる『ボロル・トリ』(水晶の鏡)には、フンカルに関して比較的詳しい記述がみられる〔鍾 2010: 50-53〕。フンカルの地理的位置については、ブハラ(Buqar)とサマルカンド(Samayar)の西にあり〔BT/H: text 53/19v; BT/L: 365-366〕, またフンカルの地の北西には馬の頭をもつ人間と鹿の角をもつ鰐がいるティン・テンギスという大きな湖が, 南にはメッカ(マッカ)があると説明されている〔BT/H: text 5v; BT/L: 369〕。さらにフンカルの内情に関して次のようにある。

エジル河(ヴォルガ河)の日が沈む方角に10昼夜進めば, コンケル(Köngker)のハーンの都市である。その部民(ayimay ulus)の名をテュルク(Türük)という。領域の外縁には石の壁があり, 300⁽¹¹⁾の入口がある。入口一つ一つの間隔は彼らの〔距離〕基準で360里であり, 漢人の基準であれば720里である。ハーンの都市には24の門があり, 中央にある宮殿の楼閣は黄金で造られ, 四方の宮殿は四色の陶製レンガで造られている。その国の衣服と冠帽は非常に豪華だ。そのハーンは自身を「我こそは瞻部洲⁽¹²⁾の大ハーンなり」と驕っている。ハーンの都市には瞻部洲の33の玉座が置かれている。その地域では一・二年ごとに風害があり, 家屋や集落が壊れることがある。その〔地の〕人々には異なる言語をもつ12の部民がいる。ハーンは, 安寧を求める者の上に金・銀・貨幣を撒く。その国の民は井戸の口と水〔用〕の器を金や銀で輝かし, 各種の宝石をはめ込んでいる〔BT/H: text 5r-5v; BT/L: 368-369〕。

フンカルのハーンが支配する民を「テュルク」と述べる点は興味深い。またここに描かれる宮殿の豪華さ, 人々の豊かさ, そしてハーンが金・銀・貨幣をばらまく行為などは, 椿園七十一『西域聞見録』(乾隆42年〔1777〕序)の「控噶爾列伝」における描写〔小沼 2006:

⁽¹⁰⁾ オスマン王家の出自はテュルク系のオグズ族に由来するとされているが, 小笠原弘幸の研究によれば, オスマン朝下で著された史書の中には, モンゴルをオグズ族の一支として位置づけ, オスマン王家とチンギス家を同族と理解するものがある〔小笠原 2014: 117-120〕。

⁽¹¹⁾ 留金鎖の校註本では, 300を360の誤りとしている〔BT/L: 368〕。

⁽¹²⁾ 瞻部洲(Mon. Dzambutib < San. Ĵambu-dvīpa)とは, 南瞻部洲, 閻浮提ともいい, 宇宙の中心にある須弥山の南にある人間世界を意味する。

115–116; 2008: 158–159] と共通しており、ジンバドルジが『西域聞見録』を参照した可能性を想定できる⁽¹³⁾。あるいは、椿園七十一の情報源が1771年にヴォルガ河流域からジュンガリアに帰還したトルグート人であったことを考えれば、ジンバドルジが彼らからフンカルに関する情報を入手した可能性もあろうが、いずれも推測の域を出ない。ただし、フンカルに関する記述内容の事実関係はともかく、1837年成立の『ボロル・トリ』における記述の具体化は、18世紀中葉の西方遠征以降、清朝国内に蓄積される中央アジア以西の情報量が格段に増加したことを示していよう。

文献一覧

- Brophy, David. 2013. “The Junghar Mongol legacy and the language of loyalty in Qing Xinjiang,” *Harvard Journal of Asiatic Studies* 73 (2), pp. 231–258.
- BT/H: Heissig, Walther. 1962. *Bolur toli: spiegel aus Bergkristall von Jimbadorji (1834-1837) in Faksimile mit Einleitung und Namensverzeichnis*, Kopenhagen: E. Munksgaard.
- BT/L: Ĵimbadorĵi. 1984. *Bolur toli*, Liu Ĵinsuo kinaĵu tayilburilaba, Begeĵing: Ündüsüten-ü Keblel-ün Qoriy-a.
- GhU/Ĉ: Gomboĵab. 1980. *Gangy-a-yin urusqal*, Ĉoyiĵi tulĵan qariĉayulĵu tayilburilaba, Kōkeqota: Öbür Mongĵul-un Arad-un Keblel-ün Qoriy-a.
- GhU/P: Гомбоджаб. 1960. *Ганга-йин урусхал (история золотого рода владыки Чингиса.– сочинение под названием «Течение ганга»)*, издание текста, введение и указатель Л. С. Пучковского, Москва: Издательство восточной литературы.
- 濱田正美 1993 「「塩の義務」と「聖戦」との間で」『東洋史研究』52 (2), 122–148 頁。
- Kim Kwangmin. 2012. “Profit and protection: Emin Khwaja and the Qing conquest of Central Asia, 1759–1777,” *The Journal of Asian Studies* 71 (3), pp. 603–626.
- 森川哲雄 2007 『モンゴル年代記』 東京：白帝社。
- Mosca, Matthew. 2010. “Empire and the circulation of frontier intelligence: Qing conceptions of the Ottomans,” *Harvard Journal of Asiatic Studies* 70 (1), pp. 147–207.
- 小笠原弘幸 2014 『イスラーム世界における王朝起源論の生成と変容：古典期オスマン帝国の系譜伝承をめぐる』 刀水書房。
- 小沼孝博 2006 「「フンカル国」小考：18–19 世紀のユーラシア東部におけるオスマン朝認

⁽¹³⁾ なお、『西域聞見録』には満文版がある。中国社会科学院民族学与人类学研究所図書館に『西域回族風俗志』(Wargi ba i hoise uksura i an tacin i ejebun) の名称で所蔵されている満文抄本(残缺)は『西域聞見録』の一部であり、「控噶爾列伝」を含んでいる。

- 識の一端」, 楠木賢道編『清朝における満・蒙・漢の政治統合と文化変容』(平成 14-17 年度科学研究費補助金(基盤研究(B))研究成果報告書), つくば:筑波大学, 112-120 頁。
- 2008 「“控噶爾国”小考:18-19 世紀欧亚東部奥斯曼朝認識の一端」『民族史研究』8, 153-163 頁。
- Onuma Takahiro. 2012. “Promoting power: The rise of Emin Khwaja on the eve of the Qing conquest of Kashgaria,” 『遊牧世界と農耕世界の接点: アジア史研究の新たな史料と視点』(『学習院大学東洋文化研究所調査研究報告書』57), 東京: 学習院大学東洋文化研究所, 31-60 頁。
- 佐口透 1986 『新疆民族史研究』 東京: 吉川弘文館。
- 坂井弘紀 2008 「中央ユーラシア・テュルクの叙事詩に描かれる「異民族」」『北東アジア研究』別冊 1, 109-133 頁。
- Temir, Ahmet. 1951. “Zwei Dokumente zur neueren Geschichte Ost-Turkestans,” *Oriens* 4 (1): 81.
- . 1961. “Ein osttürkisches Dokument von 1722-1741 aus Turfan,” *Ural-altaische Jahrbücher* 33 (1/2), pp. 192-198.
- 和田博徳 1958 「明代の鉄砲伝来とオスマン帝国: 神器譜と西域土地人物略」『史学』31 (1/2/3/4), 692-719 頁。
- Yakup, Abdurishid. 2007. “*Vacu or Gaju?*: On a place name in an 18th century Uyghur document,” in H. Boeschoten and H. Stein (eds.), *Einheit und Vielfalt in der türkischen Welt: Materialien des 5. Deutschen Turkologenkonferenz Universität Mainz, 4.-7. Oktober 2002 (Turcologica)*, Wiesbaden, pp. 57-70.
- 鍾煥 2010 「控噶爾史料評注」『民族史研究』9, 96-91 頁。
- 2014 「清史獲悉土耳其素丹称号時間考辨」『清史研究』4 (2014), 108-112 頁。

【付記】本稿は平成 25 年度文部科学省科学研究費(若手研究 B)「清代東トルキスタンにおけるトルファン郡王家の位相と役割」(研究課題番号 25770259)による研究成果の一部である。

(東北学院大学文学部)